

「予算」を見る眼、深まる分析力

予算委員会 専門員

ふじい りょうじ
藤井 亮二

年末に向けて「令和2年度予算」の編成が進められている。平成から令和の時代に入って初めての本格的な予算編成となり、新しい時代を見据えた予算としてこれからの我が国の針路を示すものと注目されている。

国の予算は個別の施策を展開する上で欠かせないにもかかわらず、一般の方だけでなく、政策に関わる関係者にとってもわかりにくいと言われることがある。ミクロの視点でそれぞれの事業にいくらの予算が付いているかは理解しやすいが、マクロの視点で全体を見て分析し、その予算が持つ特性や課題を抽出するためにはコツがあるのではないか。今回、本誌の「視点」に寄稿する機会を得たのでこの場を借りて、普段、自分なりに「予算」を分析するために意識しているコツについて述べたいと思う。

国の予算を分析するコツ、それは常に「タテ」と「ヨコ」から見ることに尽きるのではなかろうか。まず、「タテ」に見るとは、時系列的に予算の推移を見ていくことである。昨年度と今年度を比べる、5年前と比べる。これである程度の特徴はつかめる。しかし、分析するためには2つの時点をピンポイントで比較するのではなく、毎年度の動きを「線」で見るべきであろう。そして平成時代の30年間、あるいは高度経済成長が終わる昭和50年頃からという長期間の推移を見ていくと思わぬ発見がある。戦後しばらくは一般会計予算の社会保障関係費の規模は公共事業関係費を下回っていたが、「福祉元年」といわれた昭和48年の翌年、昭和49年度予算で初めて社会保障関係費が上回った。社会保障が最重要の政策課題に躍り出た瞬間である。その後、社会保障関係費は鰻登りに増大していく。

また、一般会計予算書の厚さを見てもおもしろい。平成30年間の平均989頁に比べて、平成12年度の1,374頁、同26年度1,347頁、同31年度1,494頁だけは突出して分厚い。それぞれ省庁再編、消費税率5%から8%への引上げ、同8%から10%への引上げがあった年度だ。制度改正と予算の内容、予算書の体裁がどのような関係にあるのか興味深い。

一方、「ヨコ」からとは、同時点で比較しながらの分析だ。平成31年度一般会計予算全体が対前年度比で3.8%増となる中で、社会保障関係費は3.2%増、防衛関係費1.3%増、公共事業関係費15.6%増と続く。この背景にあるのは何だろう。また、特別会計の歳入に占める一般会計からの繰入れの割合は年金特別会計が15.2%、一方、労働保険特別会計は0.4%、地震再保険特別会計では皆無だ。同じ保険事業特別会計なのに、この違いはどこから来るのだろうか。さらに、予算全体を他国と比べると我が国の政策の特徴が鮮明になる。

予算は数字が並んでいるだけだが、味気ない計数自身がその特性を表し、予算関連の制度をもっと知って欲しいと問いかけてくる。更に深くは「タテ」と「ヨコ」を組み合わせ、**「ナナメ」**からも考えることによって分析に深まりが出てくる。